

41. 冬分村の宮淵にはみやぶち 鴛鴦の群れが遊んでいた。宮淵の上流のおしどり 鶺鴒の首も大きな淵で、ここも寄る場所であった。その他大海の二つ池、長篠の基石の池など、近くでこの鳥の遊ぶ範囲はほぼ定まっていた。



鴛鴦が翔ぶ時は、水面ばかり視ているので、近づいた時、長い竹竿など差し出すと、それに衝突して墮ちるといふ。長篠と大海を結ぶ渡船が鉄索をたぐって渡すようになってから、その鉄索に鴛鴦が衝突して時々墮ちる。一冬に五つも墮ちたことがある。まだ見たこともない大きな鴨に似た鳥が衝突して墮ちたこと

もあると、渡し守が語っていた。

段戸山の森林の中を流れる川では、丸太ん棒で鴛鴦や鴨を打ち落とすというが、原理は鉄索に衝突するのと似ている。川は宛然森野のトンネルの中を流れている。そこを朝早くまだほの暗い頃に、鴛鴦や鴨の群れがそのトンネルの中を渡って来る。山で働く杉たちはそれを測って、丸太ん棒を持って待っている。鳥が近づいたとき打ち落とす。わざわざ打ち落とすまでもなく、丸太を差し出しているも、衝突して三つ四つ重なって墮ちると、杉の一人は語った。変わった嘘のような猟法である。鳥が宙を翹ぶ時は、前方は見えぬらしい。電線に山鳥が衝突して落ちるといふのも、その間の事実を説明している。

42. 北設楽郡の山々にはほよ 寄生木が多い。冬になって紅く実が色づく頃は、子供たちが採って食べたが、この寄生木の実に山鳥がついた。寄生木に山鳥がつくのは暮れ方である。狩人がそこを待って撃つのを寄生木待ちというた。山里のことで珍味というては何もないが、この寄生木待ちの山鳥は珍味であった。山鳥雑炊というて、肉と飯とを一緒に炊き込むのである。



43. 啄木鳥のことをこの地ではテラソまたはテラッポーという。寺に恨みがあって突つくというが、人家を離れた神社なども、このテラッポーの被害者で、板壁に

片端から穴を開けられる。直径三、四寸のまんまるい穴である。巣を造る目的で試みるとか、餌を探すというが、目的は別であるらしい。豊根村字牧野島のお宮には、一つの板壁に二十幾つの穴を開けてあった。その中の三分の一は、裏から板が打ちつけてあるから、後の三分の二は、それ以後の仕業と思われる。

44. 話が再び山鳥の話に戻るが、山鳥の尾に十三段の斑があるのは人を誑かすという。それで山鳥に出会った時、逃げようとせぬものには、構うなと教えられた。明治三十何年に私の家の子守が妹を負って出たまま、日が暮れても還らぬ。それで隣家にも応援を求めて心当りを捜索した。間もなく山の中にいるのを発見して連れ戻した。子守のいた場所は里からかなり山に入ったところであった。後で話を聴くと、はじめ山口で山鳥を見つけ捕らえようとして次第に山深く入っていったと語った。萱立の中で尾を掴むと、するりと抜けて鳥は三、四歩前に逃げる。また掴むと抜けるというわけで、日の暮れも気づかなかったと言う。これとまったく同じ話を北設楽郡御殿村で聞いたことがある。

45. 山鳥は夜陰に山越しする。その時は人魂のように赤い火になって長く尾を引くという。あるいはこれは尾に一三段の斑があるものともいう。

山鳥の尾は魔除けになるというて、門口などに挿してあるのをよく見かけた。しかし、十三の斑のあるのは滅多にない、多くても一一段程度である。

一三段の斑のある尾は、井戸を掘る時、水の有無を測るに用いる。これと思う場所に立てておくと、一夜の間に斑の幾つ目かに露の玉が上っている。それで水の有無と深さを知るといのである。

山鳥にはどうかすると肉が臭くて、食べられぬものがあった。しかしこれは肉が臭いのではなくて、糞ぶくろ（大腸）を傷つけるためともいう。何せ悪食する鳥だから、早く臓腑を抜かぬと、肉が臭くなるおそれがある。

46. 雉子や山鳥は鶏の類だから、雄は激しい闘いをするというが、子供の頃、僅々四、五間の距離から、その激しい闘いを目撃したことがあった。村の北山御料林の笹谷に浄瑠璃姫の祠があって、そこに出向いている父のもとに、弁当を届けに行った時であった。冬枯れの草山の尾根を過ぎて、足を御料林に踏み込むと、あたりの様子が全く変わってしまう。古木が枝と枝とを絡み合せるように繁っていて薄暗い。太い藤蔓が蛇のように大木に巻きついて、朽木がところどころ倒れている。それを踏み越えて往くと、突然はげしい翔音がするのに立ち止まった。恐る恐る前方を透かして見ると、赤い巨きな鳥が二つ、向かい合って闘っている。そこは少し

平地になって、木も疎らで遠くまで見通される。二つとも同じような大ききで、二、三尺も跳び上がったと見る間に、二つが重なり合って落ちる。また離れて跳び上がる。鶏の蹴合いそのままに猛烈な勢いで闘っている。赤く輝くような羽毛が一枚ごとに逆立っている。思い設けぬことではあり、恐ろしさも手伝って、蹴合いをふり返りふり返り、父のいる方に走った。そのことを父に語ると、それは山鳥の蹴合いで、山ではときおり見かけることだと教えられたが、鶏の蹴合いとは較ぶべくもない壮観であった。その時の鳥の姿がいつまでも眼に残って離れなかった。

47. 山鳥にもあることだが、山で雉子がホロロ打つ音を聞くのは淋しいもので、大地の底から響いて来るようであった。雉子は雛を伴って家の近くへ出て来ることがあった。雛は鶏と全く同じであるが、野の鳥だけにひととき敏捷で、さっと草叢に遁げ込んでしまう。山田の畦の草生で、草を刈ったら、そこに雉子の卵が七つ産んであったと言って、母が袂や懐中から取り出したことがあった。雉子はばかりで、どこでも構わず卵を産むなどと言うた。

48. ニオイ鳥というのがいた。この鳥が人家をはさんで鳴き交わすと、その家に死人があるとして気味悪がった。ほんとうは水鶏くいなだと言うが、日の暮れ方や朝早く鳴く。暮れ方などその声を聞くと、ほんとに病人が目の前に呻吟しているようであった。呻吟を方言でニオウと言ったのである。幼年の頃、家人が全部出払ったあと、弟と二人で座敷にいと、家の近くの藪でこの鳥が鳴き出したのに、怖ろしくて、隣家へ走ったことがある。

ウイ鳥というのがいた。これはニオイ鳥とは別だと言うが声が似ていた。姿を見たことはないが、夏の夜の明け方によく鳴いた。遠く川を隔てた向かいの村で鳴くのも聞かれた。ウイ鳥とニオイ鳥が鳴き交わすとやはり人が死ぬと言って怖れた。

49. 蒼鳩は稀にしかいなかった。その鳴き声は鳥の声らしくない、深山の声とでもいった感じがかった。

ハーオハオハオハハハ

一人で働いている時など、にわかになんて淋しくなって還って来たなどと言った。

牛追鳥というのがいた。駒鳥のことであるらしいが、村の人はそうは言わなかった。

シーッホイホイホイ

いかにも牛方が牛を追うように聞かれる。

ゴキトン鳥は夜鳴いた。

ゴキットントン

山仕事をするたち人は一様に淋しい声だと言う。キットントンと鳴くともいい、実は仏法僧だという説もあった。

また御祈禱鳥だともいう。

仏法僧は鳳来持山に棲むと言うて、雄はブッポウと鳴き、雌がそれに合わせてソーと後をつけるなどといった。仏法僧に限らず夏の夜には、種々の鳥が啼いた。ゴロスケと言うのは梟のこと、オクンボは木の葉づくであった。どちらも屋敷林に来て鳴いた。梟が昼間鳥の群れに追い出されて、隣家の座敷へ飛び込んだことがあった。翌日は杜鵑が舞い込んだと言って、これも捕らえて籠に入れて飼っていた。

50. 鳥の話の最後に、ある狩人の夢の話の一つ加えておく。夢の主は北設楽郡

みつせ

三瀬の生まれで、名を原田為作という。今も生きていれば多分八十余の年配で朴訥そのもののような人物であった。三瀬はこの地方で名高い明神山の麓で、戸数二十数戸の、陰しい山の底に展けた部落である。為作は若い頃は狩人であった。あるとき近くの本郷町のものに頼まれて啄木鳥を二羽撃って与えた。その黒焼きは肺病の妙薬というので、禁鳥ではあるがひそかに撃ったのである。その後間もない頃のこと、ある夜不思議な夢を見た。

その夢は、為作が家の前に立っていると、どこからともなく靈妙な鈴の音が聞こえて来た。不思議に思って空を仰ぐと、蒼く晴れた空を真っ白い鷹が一羽、渦を描いて翔んでいる。見るとその鷹の羽毛の一つ一つがはっきりと見え、そのことごとくに銀の鈴がついていて、その鈴が触れ合って微妙な音を立てる。うっかり見惚れているうちに、その鷹がどうやら己を狙っていることに気づいた。それを知って慌てて縁の下に這い込んだが、もう遅かった。脚を掴まれてずるずると引き摺り出された。やれ怖しやと思って振り返ると、今まで鷹だと思ったのは、鼻の高い天狗さんで、男に向かって言ったそうである。「お前は人の病気を治すとは言え、何も生きたものの命を奪らぬでもよいではないか」とそう言ってから言葉が続けて、他人の肺病を治したくば俺が教えて進ぜると言って、三種の薬の配合を教えてくれた。それを聞いた瞬間に目が醒めた。

汗をびっしりかいていた。しかし何かしら楽しかった。やれ嬉しや、これこそ神のお告げである。いよいよ運が向いて来た、と心中大いに悦んで、さて夢に聞いた

薬を思い返してみた。ところが三種の中の二品だけははっきり記憶にあるが、残り一品が何としても思い出せぬ。これにはほとんど弱ってしまった。

そこで思案の果てに、せつかく神様が霊薬をお授けあったのに、忘れたのはわが身の信心が足りぬからだ、なにとぞ今一度薬の名を教え給えと、それから毎日水垢離を取って、二日間続けて示顯を待ったがついにお告げがなかった。それ以来四十幾年、あの夢は一日として忘れたことはないと言った。昭和五年の冬本人から直接聞いたものである。